

# 『台湾紀行』に見る司馬遼太郎の台湾表象 ——日台における戦前～「戦後」記憶の交錯

岸川あゆみ

## 1. はじめに

司馬遼太郎の『台湾紀行』は、『週刊朝日』に1993年7月2日号から1994年3月25日号まで、「街道をゆく」シリーズの40本目(連載1041回～1075回)として連載された。この時期は、台湾で約38年間継続した戒厳令が1987年に解除されたばかりだった。そうした時期に台湾現地を実際に周り、総統就任直後の李登輝との対話なども織り込んで日本で発表された『台湾紀行』は、いわば日本と台湾の「戦後」<sup>1</sup>の「出会い直し」の初期段階において、日本社会における台湾像の形成に影響力を持った作品の筆頭と言える。

拙稿(2022)では、戦後日本の台湾認識の一端を明らかにするものとして、『台湾紀行』を対象に作中の台湾表象を、司馬の戦前・戦中・戦後に跨る東アジア観の形成過程と対照することで、司馬がどのようにその構図の中に台湾を位置付けたかを分析した。その結果、戦前・戦中に大日本帝国下の教育の影響を受けつつ司馬が形成していた東アジア観が、戦後にも持ち越されていた点を指摘した。このうち、拙稿の中で主に検討した戦前・戦中からの東アジア観とは、ユーラシア大陸を跨ぐ規模で展開された「ウラル・アルタイ語圏」についてだった。「ウラル・アルタイ語圏」構想から出発した東アジア観という視点は、司馬が東アジアの近代国家像の理想として模索していた台湾像を、日台間という二地域間の視野に囚われずに検討するうえで重要な視点だったといえる。

他方で、拙稿の終わりでも指摘したように、先行研究でも度々指摘されてきた司馬の近代認識の欠如、とりわけ旧植民地という枠組みで台湾を見た場合の、司馬の東アジアへの眼差しに関しては、「ウラル・アルタイ語圏」を鍵とした分析視点では、かえって十分に検証できなかったといえる。先述の通り、日本におけるその後の台湾認識に多分に影響を与えた作品として『台湾紀行』を取り上げる以上、司馬の台湾表象における、旧植民地としての台湾という側面を分析することは不可欠だ。この場合、まず鍵となるのは拙稿(2022)で、戦前・戦中における司馬の東アジア観として、「ウラル・アルタイ語圏」と並んで提示した「日本圏」のほうの行方だと考えられる。戦後に執筆された『台湾紀行』では、この「日本圏」はどのように影響して

1 日本における戦後という言葉は、一般的に1945年の敗戦を境として、それ以降を意味するが、東アジアの他の国々にとって日本の敗戦以降が必ずしも「戦後」、つまり「戦争の後」を意味するわけではない。例えば、本稿で扱う台湾にしても、日本の敗戦以降、国共内戦の舞台となっている。こうした点を踏まえて、本稿では前者の一般的な意味での日本における敗戦後を指す場合は括弧なしで表記し、日本の戦後と重なる1945年以降を台湾において示す場合は、括弧付きで表記する。

いたのか。

そもそも司馬のいう「日本圏」という言葉は、「大日本帝国」の文化圏内の同質性というニュアンスを含むものだった(拙稿:2022,pp.22-23)。この「日本圏」の意識は、台湾への旅の動機にも色濃くみられる。陳舜臣(2005)はまさに、「司馬さんの台湾旅行の目的は、日本に五十年間統治された土地に、「この国のかたち」がどれほど投影されたか、検証しようとしたのであろう。」(p.35)と、指摘していた。こうした「この国のかたち」の探求は、「街道をゆく」全体のテーゼであった。その探究は、近代以降を対象とした「日本圏」の意識に限らず、例えば「ウラル・アルタイ語圏」に見られるように、さらに過去の世界へと遡り、「この国」の源流を追い求める性質も持っていた。そのうちには、例えば柳田国男の提唱した南方古俗なども含まれており、現に台湾への旅はその南方古俗を追い求める旅でもあったという(山折:2019)。しかし、詳細は本文に譲るが、結果から見ると、司馬は台湾では古代の地層まで遡らずとも、同時代に出会った人々の中に、旧植民地との戦前、戦後の関係性というかたちで「日本圏」の名残を見出すことで、「この国のかたち」を見つけることができってしまったという見方もできる。

他方で、そのように「日本圏」という意識から出発した司馬の旧植民地に対する認識については、先に触れたように、現在では『台湾紀行』を含む司馬作品全体に、批判的検討が加えられている。その中では、総じて司馬の旧植民地への認識の欠落が指摘されてきた。まず、司馬作品全体に見られる傾向について、丸川(2005)は、司馬の近代の歴史観に「近代日本国家の形成過程と台湾の植民地統治が密接に繋がっている、という歴史のフレームワーク」があり、植民統治がともすると日本国家の近代化の必然であった、という文脈に組み込まれかねない危険があることを指摘している(p.12)。成田(2001)も、司馬が1970年代の言説において、台湾出兵、韓国併合を明治政府内の権力対立の結果として描くことで、侵略行為を国内問題に矮小化したことを批判している。それでは、このような傾向について、『台湾紀行』はどのような位置にあったか。成田(2009)は、この点について「これまで回避気味であった植民地支配に関しても、台湾には踏み込みをみせている。戦後の国民党支配により植民地の記憶が複雑になっていることにも目を配るが、しかし「責任」の認識は持ちえていない。」という評価を示した(p.340)。つまり、司馬の筆致は、大日本帝国の構造など、植民地や戦争のシステム全体が十分に扱われないまま曖昧にされているという点が批判されている。

この評価について、改めて、作中の旧植民地についての言及を検討してみると、大日本帝国の支配への批判も確かに何箇所かで触れられている。具体的には、「他国を自国領にする営みは、基本的におろかしい」(『台湾紀行』p.159)という言葉に見られるように、植民地化以前に「台湾にはすでに文化が充満していた」ところへの国家神道の持ち込みなどを「国家的奇行」と批判する(同上,p.396)ほか、当時の総督府官吏の腐敗(同上,p.154)や警官が住民の自尊心を傷つける存在(同上,p.422)でありえたが故に、原住民らの抵抗が起きたことなどに言及している。さらに旅の後半、とりわけ原住民の文化についても触れる機会の多かった台東に向かうに従って、少しずつ「他の郷国を植民地にするということは、その地で生きているひとびとの-かれら個々の、そして子孫にいたるまでの-存在としての誇りの背骨を石で砕くようなものである。」(同上,p.418)という思いが強まっていった過程も見受けられる。

他方で、総督府が整備した台湾でのインフラなどにも触れているが、その点についても、日本統治下の「功績」として単に評価することはしていない(同上,p.104)。さらに、司馬が毎回「た

かお」と言ってしまうのを、蔡焜燦がさりげなく毎回「カオシュン」と言い換えることに言及して、「明治初年の人が北海道を蝦夷地という旧弊な語感を感じたに違いない」(同上, p.323)と、俯瞰的視点の語りを重視する司馬には珍しく自身の発言についての自省的な言及も見られる。このような帝国批判や自己認識への注意といった面が、成田の指摘した「踏み込み」に当たるのだろう。しかし、そこに今一步「責任」の意識はないという側面は、成田(2009)の分析では、帝国と植民地の非対称の力関係についての「戦中派としての司馬の歴史認識の甘さ」(p.328)が原因にあるという。つまり司馬の叙述は、日本の戦後自体の特徴でもある、「安易な「私」やさらには「私たち」の意識を阻むような「他者」の像」(成田: 2009, p.358)の欠落から逃れられなかったという。では、『台湾紀行』において、「他者」との向き合いの欠落はどのように生じたのだろうか。また、『台湾紀行』の事例における、「戦中派としての歴史認識の甘さ」とは、何を指し、どのような背景から形成されたものであるのか。

本稿では、以上の点を踏まえて、『台湾紀行』における司馬の旧植民地としての台湾への視点が、戦前・戦中・戦後にかけて、どのように形成されてきたものであるかを明らかにすることを目的とする。その手がかりとして、具体的には、『台湾紀行』の特徴として顕著な、司馬の「日本語世代」との交友を分析の対象とする。

2章ではまず、『台湾紀行』における「日本語世代」との交友が持つ特殊性を、他の東アジアへの紀行の場合との比較を通して位置付ける。続いて、3章と4章では、『台湾紀行』で日本語世代との交流のうち、中心的存在であった当時のエリートたちとの交流を対象に、彼らとの出会いの中で、戦前・戦中・「戦後」像が、相互にどのように交差していたのかを明らかにする。最後の5章では、日本語世代エリートとの交友を通して見た司馬の旧植民地に対する認識の特徴を、戦中派の経験の中に位置付けることを試みる。

## 2. 『台湾紀行』で出会った人々

紀行文にとって、出会う人の存在は、著者の表象を形作る上で常に大きな位置を占める。司馬にとっても同様で、『街道をゆく』シリーズは総じて、司馬の事前の膨大な文献調査に基づく、対象の地に関する事前理解と、その後現地に出会った人と司馬が交わした会話が混じり合ったところに、土地の表象が浮かび上がる様式だった。つまり、司馬の『台湾紀行』における、旧植民地としての台湾表象の背景を探るためには、その描写の源泉となった人々との関係を考えることが有効である。また、実際にその対照例として、『台湾紀行』で司馬の出会った人々の傾向をそれ以前の旧植民地への紀行で出会った人々と比較して見てみると、『台湾紀行』の特徴がより明確に見えてくる。

例えば、それ以前の韓国への紀行の際に、司馬は現地の人から直接「旧帝国の人間」として質問を浴びせられる経験<sup>2</sup>をしている。しかし、結局のところ、そうした形で促された「旧帝

2 成田(2009)は、「韓のくに紀行」での現地の人々とのやり取りの中に見る司馬の態度について、韓国に日本のルーツを求める自身の無神経を認識した一方で、「旧帝国の人間」として問われることを繰り返すと、「好き好んで日本人に生まれたのでないのに、過去に日本が犯したすべての罪悪を背負わねばならないのは困る」と言った言葉や、「たかが三十年で、李朝五百年がもたらした停滞の方が大きい」という持論を展開するというアンバランスがあったことを指摘している(pp.203-208)。

国の人間」としての立場も、司馬にとっては先に挙げられたような構造の問題を考え「責任」を感じる機会にはつながらず、むしろ「旧帝国」の代表として批判の矢面に立つことへの理不尽さや苛立ちの感情が、自らの手で描写された。さらに司馬はのちに、その時の経験と台湾での体験を比較して次のように述べている。

たとえばソウルなら、私のようなノンキ者でさえ、“概念としての日本人”としての緊張を覚えざるをえないが、台湾にはそれが無い。人間を“概念”で見ない。

(司馬:1998a,p.54)

この言葉は、韓国では現地の人から問われることによって否応なく「旧帝国の人間」であることへの自覚を突きつけられた一方で、台湾ではかえってそれを司馬に問う存在が少なかったということを意味している。司馬の旅に常に同行した司馬夫人・福田によれば、先に述べたように、そもそも韓国や中国に日本の起源を見ようとして渡航していた司馬らにとって、現地で古代世界に思いを馳せれば、「韓国でも、中国でも、田舎を歩いていると、「ああ、これが自分たちの故郷だ」と感じ」(福田:2013,p.273)たという。しかし、一方で現地における同時代の生身の関係としては、「中国や韓国の知人は多いけれど、心底、打ち解けられる人は、数えるほどだと思います。」(福田:2013,p.273)と、述べている。ここからは、先に挙げたように、司馬が「旧帝国の人間」として遇されることの多かった理由の一つが浮かび上がってくる。つまり、現地で司馬が出会う人々の多くは、司馬を「司馬」という個人として認識する関係性になかった<sup>3</sup>ということである。

他方、台湾の場合はどうであっただろうか。司馬が台湾に行く契機自体に、学生時代からの親友・陳舜臣の存在があったように、『台湾紀行』に登場する人々は司馬にとって旧知の仲<sup>4</sup>、または互いに経歴に共通項を持つ事で友人関係を即時に築けるような間柄が多かったのが特徴的だと言える。それを代表していたのが、『台湾紀行』の中で大きな位置を占めた、日本の統治下で日本語教育を受け日本語を話すことのできる、いわゆる日本語世代<sup>5</sup>の存在だった。

3 司馬の韓国行き前からの交友関係には在日朝鮮人の金達寿らもいた。例えば、金は日本の敗戦直後から、日本に対して強く戦争責任を問うてきたが、60年代から70年代にかけての朝鮮総連と自身の関係の変化もあり、次第に近現代史の追及から古代史へと関心を移していった。司馬が韓国への紀行を終えた1980年の対談(司馬遼太郎・金達寿・田中明:1980)では、司馬の日朝文明論と意見の一致を見せており、金との交友はむしろ司馬の論を確信に変えて行く作用があったことがうかがえる。この背景には、金自身の在日朝鮮人としての立ち位置や、金の「戦後」と司馬の戦後の重なりが考慮される必要があるが、今回扱っている『台湾紀行』の日本語世代との意向の一致の中で、司馬が台湾表象を築いていったことと合わせて、同世代の旧植民地出身者と共有した感覚が、戦中派の戦後認識に与えた影響として、検討することができるだろう。

4 ここでは、日本語世代の存在に注目したが、旧知の仲の一つには、他にも、「湾生」(台湾生まれで敗戦とともに引き揚げ、台湾を故郷とする人々)として作中に登場した田中準造のような存在もあった。田中の挿話では、「失われた故郷」としての台湾表象が示される。田中の視点での甘美な記憶が中心になるため、旧植民地表象としての「甘さ」がある一方で、「湾生」の引揚げ前後の変遷や台湾再訪についての描写は、日本社会における戦後の、台湾という存在の「空白」を意識させる側面も持っていたといえる。

5 佐藤(2013a)による、より狭義の定義では、1919年の台湾教育令の公布により、台湾人子弟を「日本人同様に化育する」方針で、より徹底した同化主義が標榜されたことで、「1919年以降に初等教育を受けた台湾人は、制度

『台湾紀行』には様々な年代、立ち位置の日本語世代が登場する。司馬とほぼ同世代の中では、李登輝、蔡焜燦、陳舜臣のほか、司馬と同じ大学の中国語学科の友人で徴兵経験のあった楊克智（創氏改名のため、司馬が当時記憶していた名は、柳井智雄）や、当時東京の医大に所属し、敗戦後台湾大医学部へ移った何既明、前述のように「戦後」に直面して交流を持った戴国輝や白色テロ下で政治犯として緑島へ送られ、のちに『監獄島』を記した柯旗化などがある。もう少し下の世代では、八田與一についての著作等を持ち司馬とも交流のあった謝新発がおり、その他にも現地で出会った中には日本統治期に甲子園出場した嘉義農林・上松選手の妻である蔡昭昭から、タクシー運転手までいた。

また、特筆すべき存在として、司馬よりもひと回り上の世代にあたる原住民でプユマ族首長の「大野さん」がいた。司馬は原住民にも関心を寄せており、大野のエピソードの他にも嘉義農林の選手や霧社事件などにも言及している。司馬は、大野に前述した南方古俗における黒潮の気質としての「大和魂<sup>6</sup>」を感じている。その上で、大野の立ち振る舞いに「日本にはもういないかもしれない戦前風の日本人」（『台湾紀行』p.437）を見ており、その世代の消失を改めて感じている。同様の感慨は、「南の俳人たち」（同上，pp.115-126）での当時も活動を続けていた台湾の俳句結社のメンバーによる『台北俳句集』への言及にも見られる。そこで司馬は、日本の敗戦後、主は誰かを定める難しさを経てきた台湾史の中で、「句集のひとつとは、老来、深刻に考えることに疲れたのか、青春のある時期まで日本人だったことに、文化として里帰りしている<sup>7</sup>」（同上，p.125）と、評していた。以上のように、作中には様々な経歴を持つ日本語世代が登場したが、その中でも中心を占めていたのは、司馬とほぼ同世代の当時の「日本人」エリートたちの存在であり、とりわけ李登輝、蔡焜燦、陳舜臣が中核的存在だったといえる。

### 3. 戦前・戦中における日台の時空間の重ね合わせ

#### 3-1. 司馬の日本語世代に対する関心

まず、司馬が日本語世代に向けた関心とは、どのようなものだったのか。はじめに当時の日本における台湾の日本語世代への視線がどのようなものであったかを確認しておく。実際に、日本語世代への注目は、『台湾紀行』前後の日本側の台湾探訪の中でも、決して司馬だけに限られたことではなく、むしろ台湾訪問の主な目的にすらなっていたと言える。笠原(2005)が、『台湾紀行』が書かれた一九九〇年代の前半は、日本統治の残照がなお旅行者の視界にくっきりと映し出されていた最後の時代だったのかもしれない。」(pp.28-29)と指摘したように、1990年代から2000年代初頭にかけての時期は、日本語世代の存在が台湾を訪問する日本人

---

としては「日本人」同様の教育を受けることになった」ことに鑑み、この台湾教育令以降に教育を受けた者を「日本語世代の台湾人」としている。本稿でも、この定義に従う。

6 ここでいう「大和魂」の司馬の定義は、「鹿児島、高知の明治までの美質」（『台湾紀行』pp.354-355）と限定されている。

7 同時に彼らのような存在は「文化的にも教養の面でも、この世代は堂々たる“少数民族”」（『台湾紀行』p.126）であり、「むろん、日本との過去はすべて遠い過去」（同上，p.359）と、留保をつけて、そこに生まれかねない過剰な憧憬や郷愁については慎重に排除してもいた。

の視界に、ようやく浮上してきた時期であったと思われる<sup>8</sup>。

無論、この時期に日本語世代に求めたものは、日本側の中でもそれぞれ異なっていた。例えば、研究者もこの時期に台湾を訪れ、過去の日本統治期と向き合う必要を感じ、その証言に耳を傾けてきた<sup>9</sup>。また、『台湾紀行』に登場した田中準造のように、再訪が可能になったこの時期に、日本統治期の台湾に在住経験を持つ人々が、その暮らしの痕跡を探しに訪れることもあった(島田:2005,p.32)。他方、この時期に活気付き始めた観光戦略の中では、台湾は「古き良き日本」「失われた日本」を感じさせてくれる土地(岩田:2020)であり、日本語世代の存在はそうしたポイントの背景の一つであると同時に、単に日本語の通じやすい海外、といった意味づけもあったと思われる<sup>10</sup>。さらに、これより少し後年に波紋を呼んだ小林よしのり『新ゴーマニズム宣言スペシャル・台湾論』(2000)では、李登輝をはじめとする日本語世代を、日本語教育によって人格形成された世代として理想化することで、日本の植民統治賛美の文脈につなげるような流れも見られた。

こうした背景の中で、司馬の持つ観点はまた、少々異なっていたといえる。司馬の場合、司馬自身は日本統治期の台湾を訪れたことはなく、従って台湾の地に過去の暮らしの記憶はなかった。しかしまた、戦後世代の訪問の場合とも異なり、戦中派の司馬にとって日本語世代の人々の戦前・戦中の経歴や経験は、司馬自身とかなり重なるところが多いものだった。つまり、はじめの問いに立ちかえると、司馬の日本語世代への関心は、内地で過ごした自身の青少年期の経験との比較・重ね合わせから発しており、そこに『台湾紀行』における日本語世代表象の特徴があったといえる。

### 3-2. 司馬自身の青少年期との対比

それでは、司馬自身の青年期との対比から発した関心とは、具体的にどのようなものだったのか。「敗戦は、日本人の運命だけでなく、台湾系日本人たちの人生をも変えた」(『台湾紀行』p.75)と、司馬は作中で述べている。ここからは、司馬の枠組みの中で、日本語世代が、日本の敗戦を機に運命を共にしてきた存在として並べられていることが見えてくる。それがより明確に示唆されているのが、司馬が『台湾紀行』の中で、「戦中・戦後の台湾知識人の運命を象徴する存在」(同上,p.234)として、冒頭から繰り返し取り上げた葉盛吉の例だといえる。

葉は、司馬と同年の1923年に台湾で生まれ、日本の敗戦後、共産党に入党して白色テロの中、1950年に銃殺された人物だった。司馬にとって、同年生まれの葉の人生の顛末は強い印象を

8 台湾の日本語世代の側でも同様の反応が見られた。『台湾紀行』にも登場した日本語世代の楊克智は、「『台湾紀行』を読んで多くの台湾人が自国の歴史を知り、李登輝さんが司馬さんに語った。『台湾人の悲哀』に同感し発奮を覚える一方、日本人が台湾人の感情、特に年長者の懐く友情を多少なりとも理解出来るようになった事は嬉しい限りです。」(楊克:1998,p.148)と、日本語世代の存在が日本側に認知されることへの意味を見出していた。

9 例えば、丸川(2000)は、台湾を対象とした植民地主義に関する研究の嚆矢と言えるが、丸川自身、1990～1993年の台湾に逗留した際に、台湾旅行する日本人が往々にして「日本語が達者ですね」といった物言いをしてしまう奇妙さ等を体感したという。そうして台湾人の声を聞く日本人側に、歴史の欠如によるナルシズムを感じたことから、日本側の台湾イメージがなぜ親日的な言説やノスタルジーになるのか、という問題意識につながったという。

10 例えば、日本映画『愛を乞うひと』(1998)では、主人公の娘が初めて台湾を訪れた際、タクシーの運転手に順に日本語で話しかけては理解されず、日本語が通じると聞いていたのに、と不思議がるシーンがある。

11 本稿では、第二次世界大戦中に青少年期を過ごした世代を指す言葉として用いる。

もたらしたことがうかがえる。そうした葉の人生への感慨の根底には、「戦後」にそのような人生の展開を迎えた葉の幼少期の記憶と、司馬自身の記憶の近似性があった。司馬は葉自身が記した幼年期の回想を読んだ際の感想を以下のように記している。

その手記に、「青い畳の新鮮な香りがかぐころ、正月がやってくる」という文章があって、くらしは私ども本州人とかわらなかつた。小学校課程である新宮公学校のころ、『幼年倶楽部』や『少年倶楽部』を愛読したというのも、私どもとおなじである。

(『台湾紀行』 p.24)

司馬は、台湾現地の学生に「学徒出陣」があったことも知らず(『台湾紀行』 p.37)、戦前の外地出身者の暮らしについてそれまで特に印象を持たなかつた。その司馬に、同年生まれの葉の生活の詳細やそこへの細かな感覚の共通性こそが衝撃を与え、台湾の人々が以前「濃厚に日本人だったことを私どもは忘れかけている」(同上, p.485)という意識をもたらしていた。そうした意識の芽生えは、司馬が台湾を、自身の過ごした時空に対する一つのパラレルな世界と認識して、関心を形成する要因になっていたといえる。

この、内地で過ごしてきた自分自身と、外地・台湾で生まれ育った人々との対比による台湾表象は、『台湾紀行』全編に散りばめられている。冒頭付近の章では他にも、「長老」(『台湾紀行』 pp.33-43)、「二隻の船」(同上, pp.75-85)など複数の章で、戦前という時空の光景の中に、自身と陳舜臣らの大学時代や学徒動員の重なり合いを描き出している。司馬が台湾に降り立った第一印象の中に、「台湾人と国を同じにしたのだという感慨」(同上, p.61)が生まれたのは、彼らの存在の実感を通してのことだったと言える。つまり、司馬が同年代の日本語世代に見出したのは、少年～青年時代の「福田定一」(司馬遼太郎の本名)として、感性を共有できる世界だった。

### 3-3. 日本語世代が司馬に示したもの

#### 3-3-1. 李登輝の場合

他方で、『台湾紀行』に登場する同年代の日本語世代の側は、司馬に何を提示し、そのことによって何を求めていたのか。まず、李登輝に注目してみる。この時の司馬に対する、李の思いは後に次のように証言されている。

「司馬さんは同世代の李氏に共感し、台湾の境遇に同情を寄せていた。そのことが李氏にも伝わり、『司馬さんなら、台湾のことを分かってくれる』と信頼していたのでしょう」

「李氏の司馬氏への思いは晩年も消えず、18年に台北市内で講演した際も、敬愛する日本人として司馬氏の名を挙げた。」

(西本 :2020a)

『台湾紀行』における李の登場の多さはさることながら、李の側から見ても、『台湾紀行』を皮切りとした司馬との交流が一定の印象を残したことがうかがえる。李は、司馬と同年の1923

年台湾生まれで、同化政策のもとで「岩里政男」と名乗り、太平洋戦争中の1943年に京都帝大農学部に進学後、翌年に学徒出陣で陸軍に入隊もした(西本:2020a,2020b)。

李が司馬と対面した際に、司馬をどのような存在とみなしていたかが端的に表れているのが「シバさん、私は二十二歳まで日本人だったのですよ」(『台湾紀行』p.104)という言葉だ。司馬が、李との初対談で、資本主義の拡大前に台湾は「公」の精神を掻き立てる必要があるのではないかと問いかけた際の答えだった。これに対して司馬は、「話がこういう方角にゆくとは思わず、私はかすかに狼狽した。」(『台湾紀行』p.105)と述懐している。ここには、日本人としての物差しを李に問いに来たのではなかった一裏を返せば、自分が日本人として台湾人に問う、という立場についての意識が薄い—司馬と、かえってその司馬に台湾の「本島人」が自分と同じ教育を受けたのを忘れていないのではないかと、「日本人」として同じ精神的土台を持つことを示して、司馬と同時代の教養を持つエリートとして対峙しようとしていた李のすれ違いがある。この李の意向は、日本語で司馬と対談していた李がおもむろに、旧制高校の言葉を使い始める(『台湾紀行』pp.107-108)姿勢にも表れている。

また、李は、司馬の旅程についても、同じく日本語世代である嘉義農林の選手への面会を勧めたほか、二度目の台湾滞在の高雄から台東までの行路に自分の作った南廻鉄道を使うよう、自ら切符を用意した(村井:2008a)。南廻鉄道に関しては、司馬が台湾紀行の中で見たいと願った同時代の台湾像への応答として、民主化を経ての台湾の現在と未来への見通しを示したものと見える。しかし、これはまた李が導いた他の旅程も合わせてみると、日本語世代である自身が「戦後」に築いてきたものの一部として司馬に提示するという意図も内にはあったのではないかとも思われる。つまり、李は旅程を通して、司馬に日本語世代の戦前・戦中、そして「戦後」の姿を提示していたのではないか。

### 3-3-2. 蔡焜燦の場合

このように旅の初期の段階では、司馬に同期としての戦前のパラレルを強く訴えかけたのはむしろ日本語世代の方だったことが見えてくる。この点は、司馬の案内兼通訳として「老台北」の名で登場する蔡焜燦についても同様のことがいえる。蔡は、1927年生まれで、戦前に奈良航空教育隊で学んだ元陸軍少年飛行兵だった。そのため、蔡の司馬との対面時の反応は、李と司馬との対面時と非常に似通っていた。蔡は台湾での初対面時に、戦前に陸軍少尉であり、自身よりも年長で階級の上だった司馬に対して軍隊式敬礼をし、冗談か本気か真意を測りかねた司馬を困惑させた。つまり、蔡が司馬に第一に示したのが、戦前に同じ日本陸軍経験を持つ者同士としての姿勢だった。蔡は、『台湾紀行』の案内役を調整していた吉田が、台湾の外交官から「日本と台湾の関係を熟知している」と紹介された人物で、実際に日台断交以降、駐台の日本の報道局がほぼ空白化した時代にも日本の記者たちの日台間の取材ルートを作っていた、という歴史的意味も持った人物で、李ともきわめて近い関係にあったという(村井:2008b, 藤原:2019)。

蔡は過去に、日本の記者に対して、日本統治時代に日本人から差別された経験を語ったこともあった。しかし、『台湾紀行』については、「台湾人の細やかな気持ちや、日本統治時代の実態を正しく載せてくれて感謝している」と述べ、李が「私は22歳まで日本人」と発言したこ

12 司馬(1998b)によれば、李登輝が陸軍少尉であったことは、当時の台湾では公表されていなかったという(p.74)。



とも好意的反応を示していたという(藤原:2019)。つまり、多くの旅の行程を共にした蔡が『台湾紀行』を評価する際に重視した観点の一つは、司馬が日本語世代について戦前・戦中を「日本人」として生きた存在として記述したことだったといえる。

### 3-3-3. 陳舜臣の場合

さらに、先に挙げた兩名と司馬を、交友だけでなく経歴の上でも媒介する位置にいたのが、陳舜臣だった。陳は、1924年に神戸市に生まれており、1941年に大阪外国語学校印度語部に入学し、46年に一度台湾へ渡ったのち、49年から再び神戸に戻り、その後、日中の歴史を題材とした数々の小説で多くの賞を受賞し、その貢献から『台湾紀行』の連載時期と重なる93年には朝日賞を授与されている(大村:2015)。陳はルーツを台湾に持ち、日本の敗戦で一度日本国籍を喪失しているが、内地に生まれ育ち戦後も生活基盤はほぼ日本だったため、李や蔡と異なり、厳密には「日本語世代」というよりも「在日台裔」という方が正確かもしれない。陳は、大阪外語学校(現・大阪大学)での司馬の一年先輩として、専門科目以外では一緒に授業を受けており(村井:2015,p.250)、その時代から神戸・大阪の方言で話し合うような友人関係でもある。『台湾紀行』以前にも、韓国、中国(福建省)紀行などにも同行していた(陳:1998)。『台湾紀行』でも初回の李との対談や台湾南部へのバス旅行などにも同行しており(陳:1998)、すでに述べたように司馬が台湾を訪れる動機の一つになっていた。

陳は、その業績から日中の「知の巨人」として認知されてきた一方<sup>13</sup>で、台湾との関係について言及されることは、相対的には少なかったといえる。陳自身も、228事件を境とした台湾の激変への体感と戒厳令の影響などから、台湾について小説で描くことはある時点で断念していた(垂水:2017,p.34)。その後の台湾への言及では、司馬との交友などを含め、日台を二つの故郷として書き出す方向が自伝のかたちなどで見られた。司馬もまた、台湾行きを勧めた陳の心情について、「第二の故郷」を自分に見せたいのだと考え、「自分が案内するという意味だと思う。」と当時の担当者に伝えていた(村井:2015)。こうした側面は、長年の付き合いのあった司馬にも、陳が今まであまり見せてこなかった面だったといえる。先に挙げた、二人の日本語世代が見てきた「第二の故郷」の戦前、そして「戦後」の光景は、228事件前後に台湾に滞在し、その激変を目の当たりにしたことで日本へ戻った陳にとっても、もう一つの平行な時空間として映っていたと考えられる。その結果、台湾への紀行を通して、司馬にも自身が体感したような日本の戦後と平行の姿としての台湾を見せようとしたと思われる。

### 3-3-4. 日本語世代側の背景

このように、『台湾紀行』における三人の司馬に対しての意向には、司馬と同様の教養文化、もしくは軍隊経験を共有するという意味で、いわば同世代の「日本人」としての側面が打ち出される傾向があったと見られる。こうした傾向の背景には、日本の敗戦を契機とした外部環境の変化が、本人の肌感覚で回収しきれないほどの変化でありえた(佐藤:2013b,p.34)中で、アイデンティティの一部としてそうした側面が持ち越された部分があったと考えられる。<sup>14</sup>

13 逝去の際でも、「これからの日中関係を示唆する資料としても価値が高い、偉大な仕事の数々を残された」(浅田:2015)という評価が掲載されるなど、概ね中国史に造詣の深い作家としての評価が目立った。

14 無論、日本語世代といっても、人によって多様な認識・主張がある。それぞれの戦前～「戦後」の環境の違い

この点について、例えば李の場合を見てみると、その「アイデンティティ」が教育を介したものとして自己形成の一部になっているという意識を垣間見ることができる。3-3-1で挙げた『台湾紀行』の描写の中からも見えてくる点ではあるが、この後の李の言説では、そうした認識がより明確にうかがえる。李は度々、日本の教育が自身の自己形成の中にあつたことを述べてきた。李にとって、22歳までは日本教育で、日本の敗戦後4年間の中華民国の大学教育も日本人教授が行ったので、実際には22歳以降も日本教育の延長だったという(李:2020, p.267)。その日本教育から会得したものは、李自身が総括するところでは、「自我」の思想を徹底的に排して、客観的立場で考える、ということだった(李:2020, p.272)。このように、李にとって、「日本人」であつたという言葉は、「日本の教育」という具体的な留保があつたことがわかる。この点は、司馬も理解していた。実際の後日談では、李登輝の発言に対して、司馬自身が次のように語っている。

「私の魂には、ピュアな(純粋な)“日本人”の精神があります」誤解してはいけない。ピュアな“日本人”など日本のどこにもいない。日本時代の台湾で初等、中等、高等教育を受けたとき、日本でもありえないほどの知的武士としての教育をうけたという意味なのである。

(司馬:1998a, p.57)

司馬の注釈は、李のいう「日本人」の精神が、少なくとも戦中のスローガンに用いられたような「大和魂」を指すのではなく、司馬の考えるところの明治教育に含まれたリアリズム的思考を指していることに注意を向けるもの<sup>15</sup>だったと言える。この明治教育の理想という点は司馬自身にも見られる点であり、こうした言説からは、李と司馬がそれぞれ理想とした教育が重なり合っていることを、司馬自身が認識していたことがわかる。このように、「日本の教育」という具体的な点に李の意図があることを司馬が察していたことは、むしろ、同世代の教養文化を共有する人物という李に対する認識を司馬に印象付けたとも思われる。

### 3-3-5. 司馬と日本語世代の意識の交差

では改めて、ここまでで取り上げた日本語世代の意識と、司馬自身の意識は重なり合うことがあつたのか。結論から言えば、3-3-4でも既に一例を見てきたように、日本語世代の側が司馬に求めたものと、先に挙げたように司馬が日本語世代に見出したものは、『台湾紀行』の描写の中では、実際に重なり合っていた。司馬にとって彼らと共有する経歴は、大きく分けて

---

が認識の相違に結びつく点が指摘されている(五十嵐:2011)が、『台湾紀行』における日本語世代と例え似たような経歴を持つ日本語世代であっても、「アイデンティティの持ち越し」は疎か、「日本」に対する感情も様々だ。例えば、『台湾紀行』における李登輝の「私は二十二歳まで日本人だった」という発言についても、植民地のインテリとしての葛藤を見えなくし、「屈辱の歴史を懐かしむような発言」として批判した郭承敏のような日本語世代もいる(堀江:2000)。他にも、日本統治下で日本教育を受けつつ「差別」待遇への反感を感じて、抗日戦線にも参加し、帰台後に白色テロで被害を受ける中でも、一貫して、日本への反感を持ち続けた鍾浩東のような存在もある。

15 李が再三語ってきた日本教育についての考えや「日本精神(リップンチェンシン)」という言葉が、現在に至るまで司馬のつけたような留保を含んだ理解になってきたかは検証する必要があるだろう。

大学生活と学徒動員による軍経験があった。とりわけ後者は、司馬自身も李について、「会う前から懐かしさをおぼえていたのは、ひとつには、この人も私も、旧日本陸軍の予備役士官教育の第十一期生だったことである。」(『台湾紀行』p.95)と、自ら語っていたように、当時の時代背景と不可分に結びついていることで、互いの横の時代のつながりをより意識させる要因になっていた。現に、彼らの軍関係の記憶を横につなぎ合わせた描写が『台湾紀行』の記述(pp.38-39)にも見受けられる。そこで、司馬は『台湾紀行』準備中に会った大学の先輩で、のちに学長となった伊地智吉繼から、大阪のロータリーで台湾系の学生達から成る陸軍新兵の行軍の最中に、司馬の学友で中国語専攻だった台湾生まれの楊を見たことを聞いている。のちの司馬の解説によれば、この中に李も混じっていたであろうという。さらに、陳は当時適齡外で徴兵されなかったものの、楊と親友だったので、台湾出身新兵がまとめて訓練先の台湾に輸送されるのを神戸の埠頭で見送っていたという。さらに前出の何も、厚木の海軍関係勤務の台湾系が同乗した下田から基隆港へ向かう船の中で、李と乗り合わせ、ともに船中の飢えをしのいでいた。無論、司馬もほぼ同時期と思われる1943年12月1日に学徒出陣している。このように、戦前の大阪外語大学、また関西の風景という同じ時空間の中で、のちに『台湾紀行』で会った日本語世代のエリートたちがみな交錯していたことが印象的に描かれた。

このように、司馬と同年代の日本語世代の戦前・戦中が、双方の意向が一致したところで重ね合わせられた結果、司馬は当時の東アジア情勢の中で「私は台湾人になって書きます<sup>16</sup>」という発言をするに至っていたといえる。しかし、そうした重ね合わせを可能にした背景にはもう一つ、司馬の描写方針があったことが指摘できる。司馬の作品に共通して指摘されてきた特徴に、「アジア人として考える」という司馬自身の方針がある。小林(1996)によれば、司馬自身が日本人としてではなく、敢えて「アジア人という意識」でものを考えることにこだわり、「アジア人として世界に通じる普遍的な形で語ろうと努力した<sup>17</sup>」という(p.57)。しかし、この司馬のアジア人としての「普遍」を目指す姿勢はまた、旧植民地との非対称性と、その中で自身の位置については淡化してしまう面も併せ持っていたといえる。さらに、この特徴はより一般化したかたちで、「自己を縮小して物を見る」、つまり執筆者としての自己の位置や存在を特別重要視しないという特性として、司馬自身が意識していたことが明らかになっている<sup>18</sup>。では、このような司馬の叙述の特徴は、どこから生じてきたのか。次の二点が考えられるのではないか。

一つには、司馬の歴史観の特徴にも挙げられている、司馬なりのリアリズムの意識があると考えられる。司馬は自身の戦中経験を踏まえて、日本が第二次世界大戦で敗戦に至った流れに

16 この言葉には無論、国民党の独裁政権下への認識から、台湾の「本島人」の立場に寄り添って台湾を描く、という意味も込められていたと考えられる。しかし、何れにしても、台湾の通史を追う中で、成田が指摘したように、日本統治時代の構造に対する指摘が全編に薄いことを加味すると、その念頭に「日本人として」書く自身の位置付けについては希薄であった。そうした点からすると、この言葉が、司馬にとっての旧帝国と旧植民地の境が容易に乗り越えられるものであったことを示している側面は否定し難いのではないか。

17 小林(1996)は例えば、明治の歴史についても日本人にしか通用しないような定義で語ることを避ける、というようなかたちで現れていた、と指摘している。

18 延吉(2002)は、司馬が「自己を縮小して物を見る」(1973)で、自己を拡大する小説でなく、自己を縮小するように書いてきた、と述べていることに注目して、司馬のこの傾向が意識的なものであったことを指摘している(p.281)。この言葉はまた、私小説のあり方を念頭に、それを相対化するあり方を述べている側面も含んでいるだろう。

ついで、観念的な物事の判断というものが要因の一つであったと分析してきた。つまり、日露戦争後、太平洋戦争に向かうにつれて、日本は冷静に国家状況や国際状況の現実を測ることを放棄し、肥大した観念論のうちに国策を推し進めた、という見解であった。そうした批判的意識から出発した結果、その反面教師として自身の著述には己よりもむしろ、外界の状況について「ありのままに」記したい、という方向性が生まれていた。

二点目としては、そもそも司馬自身については論の対象にならずにきた、という点がある。司馬がいかに「客観的」な描写に努めても、司馬自身が相手の話を聞き、文章を書く限り、その観点は司馬のものでしかありえない。その結果、文章には否応なく司馬自身が立ち現れることになるわけだが、司馬の中ではその点を問う意識は薄かった。こうした部分について、延吉(2002)は、司馬が青年期以降において次第に、本名であり、戦前・戦中の記憶と密接に結びついた部分でもある「福田定一」から意識的に距離をとっていったことと、太平洋戦争前後の時期に対する司馬の忌避感に注目し、司馬の歴史観や著述の傾向自体が「自分自身」との距離の取り方の葛藤から生まれてきた、という見方を提起した。司馬と同様、戦中に自己形成期を過ごした戦中派の中には、「転向」という言葉に代表されるように、敗戦後の軍国主義から民主国家への急速な方針の転換に際し、戦前・戦中に形成された自分自身をどう変革するかを課題として認識する者もいた<sup>19</sup>。このような方向と対比してみると、司馬の場合では、戦前・戦中の自己と向かい合って戦後の自分をどう形成するか、という命題ではなく、むしろいかに己と離れるかが肝要だったことが浮かび上がる。その思考過程の中では、戦前・戦中の自身の立ち位置が見つめ直されることがないために、先に挙げたように韓国で旧帝国の人間であることを突きつけられても、かえって「旧帝国」の人間の代表として批判の矢面に立つことに理不尽さや苛立ちを感じる、という反応を生じさせたと推測できる。

他方で、このような司馬の特徴はかえって、台湾での同年代の日本語世代との会話において、旧帝国と旧植民地の構造と直接的には結びつかないかたちで、交友関係を結ぶことを可能にしたともえる。

## 4. 「戦後」の分岐への捉え方

### 4-1. 日本語世代における「戦後」の始まり

しかし、ここまで述べてきたように、両者の戦前・戦中の経験が重なり合うものだとしても、日本の敗戦以降という意味での「戦後」については、少なくともそこに大きな分岐があり、容易には双方の経験を重ね合わせられないように思われる。「戦後」の分岐は、遡及的に旧帝国と旧植民地の非対称を明確にするはずのものだが、『台湾紀行』ではその部分がどう扱われたのか。

『台湾紀行』において、戦前・戦中の対比として描かれる日本語世代の「戦後」は、日本の敗戦直後からの数年間のエピソードになっている。李、楊、何、蔡の「戦後」についての回想は、日本の敗戦後に大陸から来た、国民党政府による白色テロの228事件(1947年)から始まる。この時期には、彼らのような日本にいた内地留学生が、台湾大学で一堂に会して、学生会

19 例えば、1924年生まれの鈴木(2006)は、幼い頃に植え付けられた「ひたすら主義=精神主義」と対抗して、いかに「自己変革」するかが生涯のテーマとなっていったかを語っている。

を組織しており、228 事件の際には警察に代わり台北の自治を行ったという。しかし、行政長官であった陳儀側の巻き返しが始まると、彼らのような本省系の知識人は真っ先に標的となった。『台湾紀行』の中では、病氣療養でちょうど台北を離れていた楊の代わりに副会長を務めていた、元日本陸軍少尉の学生が大陸系の人々からのリンチで海に投げ込まれて九死に一生を得たのちに、横浜へ亡命しそこで生涯を終えた、というエピソードや、同時期に何が秘密警察に追われた李を自宅の米蔵に匿い、安全が確かめられるまで食事を運んでいた、という情景が描かれる。その他にも、『台湾紀行』には記載されなかったが、司馬が蔡に向かって 228 事件に際して白色テロの政治犯として処刑に送られる人を見送る際に歌われたという日本語の「幌馬車の唄」を歌えるかを問うたエピソードもあり、蔡自身の弟も歌って見送った獄中の一人であったことが明かされていた(蔡:1998,pp.89-90)。このように、「戦後」の情景も、戦前・戦中の描写と同様に、全員が 228 事件を起点とした白色テロの影響下という、同じ景色の中にいたことが印象的に描かれている。

#### 4-2. 司馬における戦後の始まり

これに対して、司馬自身の戦後はどのようなものだったか。『台湾紀行』の中では、司馬自身の戦後についての具体的描写はないが、それ以前の司馬の作品から垣間見ることができる。司馬の戦後の感慨は、基本的に戦中の軍経験との対比から生じている。司馬にとって、軍での記憶は基本的に苦いものだったと見られる。青春の数年間を軍で過ごし、軍で体験した「しごき」に人生観・社会観が崩壊するほどの衝撃を受けていたことを始め、司馬には軍の命令システムに対する不信があった。これは、戦後に司馬が作家として活動し始めてからの姿勢にも見ることができる。司馬は太平洋戦争の頃の軍部について一貫して批判し続けていたが、このような戦後における姿勢は、基本的に社会・政治のあり方に向けられたものだったともいえる。その反面、司馬の個人の実感における戦後の始まりとは、敗戦ですべてなくしたことによる「ふしぎなあかるさ」を感じていた時代(延吉:2002,pp.46-47)だった。

#### 4-3. 類似性への注目

このように、「戦後」に関して両者のトーンは大きく異なっていた。さらに、司馬にとって、こうした日本語世代の「戦後」も、彼らを通すことで 50 年越しに初めて知るものだった。自身が身近に認識してきた戦後認識との開きがあった分、分岐した「戦後」の存在に出会う衝撃は大きかったと考えられる。例えば、戦前から学友として一貫して交友を持ってきた陳舜臣も、『台湾紀行』の中で初めて司馬に明かしたことは多かった。

ペルシャ語の教授になるはずが、敗戦は未来まで奪ったか「敗戦で外国人になった」  
ため、退官せざるをえなかった。この人の口から当時のことを聞いたことはない。  
(『台湾紀行』 p.75)

20 無論、台湾でも日本の敗戦、つまり「光復」の直後は、大日本帝国からの解放によって、国民党政府の遷台に希望が持たれていた段階があった。司馬も『台湾紀行』の中でそのことには言及しているが、あくまで、「戦後」のエピソードとして描かれたのは、228 事件を発端とする白色テロ下での日本語世代の姿だった。

司馬は寧ろ長年の付き合いの陳に対して、同じ大正年間生まれの人間という意識(司馬:1999,p.85)や、自身と同じ生活文化を共有するという意味での「日本人」の学友としての認識(司馬:1999,p.128)が強かったことがうかがえる。司馬のこうした印象は、実際の陳自身との交友の中で形作られていた<sup>21</sup>。また、先に挙げたように、同級生らの中から台湾系の学生も徴兵されていたことや、陳もまたその見送りに行っていたことについても本人が語ることはなかった。結果として、陳が台湾という、当時における「外地」のルーツを持つことで経験してきた、自分とは異なった側面について、司馬は『台湾紀行』の過程の中で初めて知っている。つまり、『台湾紀行』での日本語世代との出会い、もしくは出会い直しは、司馬にとって、今まで見えていなかった旧植民地としての台湾を出自に持つ人々の戦前～戦後の、自身との分岐を等身大に感じさせる衝撃をもたらす出来事だったといえる。

しかし、そうした相違を自ら描き出しているにも関わらず、この経験は司馬を「他者」との出会い、つまり、旧帝国と旧植民地の非対称性を認識する機会に導いたとは言えなかった。その背景には、司馬が「戦争をはさんだ人生は、みな数奇である」(『台湾紀行』p.43)と述べ、自身の敗戦を機とする前後の変化と、日本語世代の「戦後」の激変を、いずれも環境の急激な変化という点で一般化して捉えていた、という点が指摘できる。このように、むしろ両者の「戦後」の変化を、類似点から捉えようとする方向性は、『台湾紀行』の中にさらに具体的なエピソードが含まれている。紀行中に司馬は、「仮想の痛み」として、日本の戦後において、アメリカでなく中華民国が九州を占領していたならば、日本も台湾接收の時のような虐殺が起こりえたのではないかと、というシナリオを開陳し、蔡が半世紀前まで自分と同じ「日本人」であったことの共感に立って、「たがいの戦後を思いあわせてみただけで、とりとめもない」と述べていた(『台湾紀行』pp.410-412)。ここでは、思考実験という留保が付けられていたものの、台湾「光復」の概念は消え去っており、それ故に「たがいの戦後」というように、台湾の状況をむしろ敗戦国の境遇と重ねるに至っている。こうした司馬の認識の枠組みの中では、戦前・戦中、そして「戦後」の日台をまたぐ時空間の切れ目はかなり曖昧になっていたといえる。

そもそも、そのように戦前・戦中から戦後がある種、途切れなく連なる感覚は、日本の文脈においても司馬が持っていたものだった。先に触れたように、司馬は戦後、軍部については、軍での自身の苦い経験から「陸軍を懐かしむなどとんでもない」(司馬:1999,p.36)と、軍隊経験自体の美化につながらないよう、慎重な姿勢を示し、批判的見方を重ねた。一方で、軍時代に生まれた友人関係については、戦後も一貫して保たれていた。敗戦後すぐに、司馬が作家仲間として再会した石浜恒夫なども戦車第十九連隊、満州の四平陸軍戦車学校の同期生であり、司馬は「なんや、大阪に帰っても、軍隊と一緒にやと思ったね。」と述べるなど(司馬:1999,pp.112-113)、交友関係に関しては軍での出会いがスムーズに戦後に持ち越されていた様子がうかがえる。無論、こうした交友の存続は司馬だけの特徴ではなく、高度経済成長期の頃から全国で盛んに成立した戦友会などを介して、生活の中にそのつながりがあり続けることは、多かれ少なかれ戦中派には見られる傾向でもあった<sup>22</sup>。

21 司馬によれば、陳舜臣自身が、自分を「日本人」だと述べたことがあるという(司馬:1999,p.128)。司馬は、この陳の「日本人」という言葉の意味を、生活文化の側面を示すものと理解していた。陳の発言の背景としては、大陸を訪ねても、日本人としか見られなかった、というエピソードが披露されている(司馬:1999,p.128)。

22 伊藤(1983)によれば、部隊戦友会や学校戦友会、また結成時期などによっても幾つかの類別があり、彼らが共

司馬はのちに敗戦以降の比較的長い期間にわたる、その交友をまとめている(司馬:1999)。それによれば、作家や産経新聞などの同業者や自身の作品の読者の他にも、発足以来ほぼ毎年参加した陸軍戦車第一連隊第五中隊の戦友会(石頭会)での再会や出会いと同時に、「秋田県散歩」(1986)や「愛蘭土紀行」(1987)の取材先でも同世代の学徒動員経験やその後の人生に耳を傾けている<sup>23</sup>。

それに対して、『台湾紀行』での李らとの出会いは、敗戦直後から「内地」の戦友との戦前・戦後の照らし合わせを経てきた先に、そこに欠けていた「外地」の時空間を補うかたちで立ち現れたものだったといえる。『台湾紀行』に登場した、同年代の日本語世代の人々の「戦後」の風景は、政治情勢のうえでも、社会状況の面でも、それ以前とは大きな変化を経たものだった。しかし一方で、『台湾紀行』での描写に見られる交友関係の側面から見ると、戦前・戦中との連続性が色濃かったともいえる。つまり、内地留学生の台湾大学への吸収を経て、日本統治下での同窓生の関係性が維持され、さらに彼らが中心となった組織が白色テロへ共同で抵抗するという経験を経ており、戦前・戦中の交友関係が「戦後」にスライドしているという点では、司馬の交友関係における感覚と重なる部分がある。『台湾紀行』にそのような描写が含まれていたことからして、このような「類似点」の認識は、司馬がそれまで日本国内で見出してきた交友関係の連続性と、台湾の日本語世代エリートにおける交友関係の連続性とを、その非対称性の部分を曖昧にして、跨ぎ繋ぐことに貢献したのではないか。その結果として、同年代の日本語世代との戦前・戦中・「戦後」の重ね合わせは、司馬の旧植民地としての台湾表象が、司馬が自身で述べたような「日本圏」の認識枠組みの中に回収されることを容易にしたと思われる。

## 5. 旧植民地に対する認識の枠組み

このような司馬による、日本語世代の戦前～「戦後」との照らし合わせは、今日の視点からどのように捉えることができるだろうか。冒頭に挙げた、成田の指摘したような「「他者」との向き合い」の欠落という点について、松永(2001)はさらに、司馬の旧植民地への向き合いを評価する時に、旧植民地への言及の寡多だけでは測れない、という難しさを指摘しつつ(p.168)、評価の起点について次のように示した。

---

有しようとした意識は軍経験という「過去」に比重が置かれている場合もあれば、戦前エリートの意識を戦後も分かち合う意味で「現在の社会的位置」などに向けられている場合もあったという(pp.165-168, pp.177-180)。いずれも、戦後の生活における自身のアイデンティティの中に、戦友会が位置付けられていたことがうかがえる。

23 『街道をゆく』シリーズでは、どの旅先でも何らかのかたちで戦争体験に言及しているほか、死去により実現しなかった最終回は、自身が軍で駐留した満洲や終戦を迎えた佐野が予定されていたという(福田:2013, p.273)。

24 奇しくも、『台湾紀行』の翌々年に、敗戦以降、在籍者全体を対象に催すのは初めてだったという、陸軍少年飛行兵に飛行機の整備や修理を教えていた「奈良航空教育隊」の全校大会が開催されている。この会には、蔡焜燦も参加しており、「飛行兵のきずなが深まった。」というコメントを残していた(「元飛行兵230人が再会/奈良航空教育隊」の全校大会『朝日新聞』(奈良)1995/9/7朝刊)。つまり、『台湾紀行』の出版された1990年代の日台の出会い直しの過程の中で、日本の敗戦以降の数十年間の空白の時期を経て戦前・戦中の交友が復活した時期でもあり、『台湾紀行』での司馬らの交友もその光景の中にあっただと言える。

植民地という、自分とまったく異質な世界に触れあった時に、それをどこまで理解できたのか、つまり他者として認識する契機がどこにありえたのかということこそが本当の問題

(松永 :2001, p.168)

これらの基準を参考に、『台湾紀行』における司馬の旧植民地世界との向き合いを再考してみると、司馬において、まず大きな特徴として、そもそも日本語世代が司馬の中で「他者」として浮かび上がっていなかったことが指摘できる。旧植民地に向き合う時の課題は、他者化された存在にどう向き合うか、というテーマがあり続けてきたが、司馬の場合は前提が異なっていたように思われる。

つまり、当初からすでに「日本圏」とみなしてしまうような親しさに始まり、戦中派の司馬にとって日本語世代との出会いも、彼らに一人一人の個人としての「顔」を見出し、より自分との近似性を感じる過程になっていたことで、彼らの存在が、戦中派としての共感のうちにあくまでも、自身の延長としてしか立ち上がらなかったことに問題があった。こうした認識の枠組みは、すでに述べたように、司馬自身が台湾の俳句会の日本語世代に指摘したような、戦前・戦中の自身の感覚に「里帰り」することが、旧帝国側の人間としての葛藤を伴わないままに戦後にも、可能となるような自己認識の希薄さが原因にある。この自己認識の希薄さこそがまさに、1章で提起した「戦中派としての歴史認識の甘さ」の内実であったと思われる。

また、司馬におけるこのような特徴が、「戦中派」世代の特徴として一般的なものであったかを考えてみると、「歴史認識の甘さ」という点は一致するものの、その内実は少々異なるものだったとも思われる。3-3-5で指摘したように、司馬の戦前・戦中への向き合いは、他の戦中派の例に見られる特徴とは異なる点があった。他の戦中派の例では、戦前・戦中において形成された自己との向き合いという課題があり、具体的には、戦前・戦中の自己と、戦後の自己との「切断」が多かれ少なかれ意識されていた。この自己認識における戦前・戦中との「切断」の一方で、外部環境の変化に対する歴史認識については「甘さ」があり、その中で例えば旧植民地との関係性などは、認識の変革の対象になりにくかったと見られる。無論、これには敗戦後の日本における歴史認識に対する背景があり<sup>25</sup>、例えば、戦中世代の上の世代によって提起された「悔恨共同体」にしても、戦争を防ぐことのできなかつた自己批判の一方で、旧植民地の存在については置き去りにしていた側面があった(成田 :2015, p.51)。

これに対して、司馬の場合は、むしろ自己認識との向き合いとは距離をとっていたため、戦前・戦中・戦後の自己に関しては前者のような明確な「切断」を経ず、なだらかに連続していた傾向があった。そうした背景があったからこそ、『台湾紀行』で、同年代の日本語世代エリートと出会った際に、双方の思いが重なることで、そこに戦前・戦中から連なる共通の感触を得ることが、比較的容易にできてしまったと思われる。このように、むしろ自己認識の側面で、旧植民地出身の人々と繋がることのできてしまったことが、戦中派として持っていた「日本圏」

25 戦後の新たな国際情勢としての冷戦構図が浸透したことで、旧植民地への認識もむしろ冷戦の色分けに変化し、清算が成されないままに共闘関係に入ってしまったことも、この世代にとって大きな背景だったと思われる。また、その後の戦後世代にとってはそうした戦後処理の甘さに加え、旧植民地の国々との断交が心理的距離を生む原因となっていた構図があり、戦中派世代とはまた異なる要因によって、旧植民地との距離が生じていったと言える。



の歴史認識の枠組みを保持する要因として大きな役割を果たしたことが指摘できるだろう。

## 6. おわりに

本稿では、旧植民地としての台湾への司馬の眼差しについて、先行研究で指摘されてきた司馬の「戦中派の歴史認識の甘さ」の背景を明らかにするため、『台湾紀行』に登場する、司馬とほぼ同世代の、当時の日本語世代エリートたちの表象に注目した。その結果、司馬側における自身の青年時代の経験との比較から発した台湾への関心の部分と、日本語世代側における同時代の教養・文化を持つ者同士として対峙する、という意向が重なり合ったところで、「日本圏」の延長としての台湾表象が描かれたことが見えてきた。

この表象の問題点としての旧植民地との立場の非対称性への歴史認識の甘さは、戦前の教育と戦中経験を通した司馬自身のリアリズムや、戦前・戦中の自己認識への再検討の薄さから生じたと思われる。また、両者の非対称性を明らかにする性質の高いはずの「戦後」描写においても、両者ともに戦前・戦中の交友関係が「戦後」にスライドしたという類似性に司馬の意識が向けられたことから、戦前・戦中、そして「戦後」の日台をまたぐ時空間が、やはり切れ目なく繋がるのが可能になった構図も見えてきた。

また、本稿で見てきた、このような司馬の旧植民地としての台湾表象の成り立ちは、司馬の歴史認識の特徴を明らかにするだけに留まらず、日本統治期における「内地」・「外地」のポストコロニアルにおける関係性についての具体例の一つとしての意義もあったといえる。つまり、本稿で焦点を当ててきた司馬と李らの交流は、同年代の「日本人」エリートとして経歴を共有しやすかった戦中派と日本語世代が、「戦後」において新たにどのように関係を結び、それが認識に反映され得たかを示す一例でもあった。本文でも言及したように、戦後日本では、知識人による戦争責任の自省の傍で植民地の存在が置き去りにされやすい傾向があった。そうした中で、後の時代における同世代の旧植民地出身者との直接の対面が、彼らの戦前～戦後に至る自己認識・歴史認識にどのような影響を与えたのかという点は、ポストコロニアルにおける「日本」という枠組みへの自省として顧みる必要がある。

こうした「戦後」の戦中派による旧植民地表象については、5章で一部の例からその差異を挙げたが、様々な立ち位置の日本語世代側の意識についての研究蓄積を踏まえつつ、例えば本稿でも少し触れた戦友会の例などにおいて、さらに検討する余地がある。そうした検討によって、本稿で取り上げた司馬の事例を相対化してゆく必要があると考えられる。

また、本稿のもう一つの限界として、司馬の視点の究明に主眼があったため、『台湾紀行』に登場した日本語世代側の「日本」あるいは、司馬に対する言説や主張・姿勢についての分析対象が概ね『台湾紀行』に限られた点がある。本稿でも、いくつかの関連文献には当たっているが、日本語世代側の視点については、特に中国語での発言も含め、今後より多くの資料を対象に精査してゆく必要がある。これらの点は、今後の課題としたい。

### 対象文献

司馬遼太郎『街道をゆく四十 / 台湾紀行』朝日新聞社, 1994

## 引用文献

\* 中国語名の著者に関しては、日本語読みの 50 音順とする。

五十嵐真子「日本語世代の語りの中の「日本」『台湾における〈植民地〉経験 / 日本認識の生成・変容・断絶』風響社, 2011

伊藤公雄「III 戦中派世代と戦友会」高橋三郎編著『共同研究・戦友会』田畑書店, 1983

岩田晋典「懐古論メモランダム - 『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ台湾編における懐かしさ, ノスタルジア, レトロ」『立教大学観光学部紀要』22, 2020.3

笠原政治「日本人と台湾先住民」『朝日ビジュアルシリーズ / 週刊街道をゆく No.9 台湾紀行』2005.3.27 号, 朝日新聞社

岸川あゆみ「司馬遼太郎の東アジア観における台湾—『台湾紀行』を中心に—」『人文学フォーラム』第 5 号, 2022.3

小林竜雄「〈アジア人〉としての司馬遼太郎 (特集: 人間の未来アジアの視点から)」『CEL』(39), 1996.12, pp.57-59

小林よしのり『新ゴーマニズム宣言スペシャル・台湾論』小学館, 2000

蔡焜燦「台湾人の心のなかの司馬遼太郎」司馬遼太郎と台湾紀行を語る会『司馬遼太郎と台湾』偉聖印刷有限公司, 1998

佐藤貴仁「現在を生きる台湾日本語世代の日本語によることばの活動の意味」『言語文化教育研究』11, 2013a

佐藤貴仁「現在を生きるかつての「日本人」- 台湾日本語世代の今 -」『交流』866, 2013b

司馬遼太郎・金達寿・田中明「なぜ「近くて遠く」になったのか (日本と韓国・あしたのために〈特集〉)」『諸君』12(4), 文芸春秋, 1980.4

司馬遼太郎「風塵抄 (2) 台湾で考えたこと」司馬遼太郎と台湾紀行を語る会『司馬遼太郎と台湾』偉聖印刷有限公司, 1998a

司馬遼太郎「書簡 / 粕谷一希あて」司馬遼太郎と台湾紀行を語る会『司馬遼太郎と台湾』偉聖印刷有限公司, 1998b

司馬遼太郎「海軍の友人、陸軍の友人へ (一) ~ (十三)」『司馬遼太郎からの手紙』週刊朝日 12-15 増刊号, 朝日新聞社, 1999

島田雅彦「島田雅彦がゆく「基隆・花蓮・鹿港」」『朝日ビジュアルシリーズ / 週刊街道をゆく No.09 台湾紀行』2005.3.27 号, 朝日新聞社

鈴木敏子『ある戦中派の軌跡』学文社, 2006

垂水千恵「台裔作家が描く台湾表象—陳舜臣・東山彰良を中心に—」『ときわの杜論叢』(4), pp.20-36, 2017

陳舜臣「学友司馬遼太郎をおもう」司馬遼太郎と台湾紀行を語る会『司馬遼太郎と台湾』偉聖印刷有限公司, 1998

陳舜臣「台湾の旅のこと」『朝日ビジュアルシリーズ / 週刊街道をゆく No.9 台湾紀行』2005.3.27 号, 朝日新聞社

成田龍一「「国民の物語」のかたち / 1970 年前後の司馬遼太郎をめぐる」『現代思想』29(9), 青土社, 2001.7,

- 成田龍一『戦後思想家としての司馬遼太郎』筑摩書房, 2009
- 成田龍一「3. 金達寿『朝鮮 - 民族・歴史・文化』」小森陽一・成田龍一・本田由紀『岩波新書で「戦後」をよむ』岩波書店, 2015
- 延吉実『司馬遼太郎とその時代 (戦後編)』青弓社, 2002
- 福田みどり「アジアの熱気を愛して」『文芸春秋』91(3), 2013.3
- 松永正義「日本の戦後思想とナショナリズム」東アジア文史ネットワーク編『<小林よしのり『台湾論』を超えて>—台湾への新しい視座—』作品社, 2001
- 丸川哲史『台湾、ポストコロニアルの身体』青土社, 2000
- 丸川哲史「『台湾紀行』に描かれた日本像」『朝日ビジュアルシリーズ / 週刊街道をゆく No.9 台湾紀行』2005.3.27号, 朝日新聞社
- 村井重俊「追悼・陳舜臣さん / 司馬遼太郎さんとの半世紀「街道」の旅にも参加」『週刊朝日』2015.2.6号
- 楊克智「追悼文 / 有難う司馬遼太郎さん」司馬遼太郎と台湾紀行を語る会『司馬遼太郎と台湾』偉聖印刷有限公司, 1998
- 李登輝「第35回正論大賞特別賞受賞記念論文 / 日本の教育と台湾 / 私が歩んだ道」『正論』583, 2020

#### 新聞記事

\* 執筆者名が不明の場合のみ、本文に書誌情報を記載している。

- 浅田次郎談 / 大村治郎「「仁」に生きた学究肌 陳舜臣さん死去、悼む声」『朝日新聞』社会 2015.1.22, 朝刊 32面
- 大村治郎「「仁」に生きた学究肌 陳舜臣さん死去、悼む声」『朝日新聞』社会 2015.1.22, 朝刊 32面
- 西本秀「「日本語世代」響き合う / 司馬遼太郎氏と親交 / 李登輝氏死去」『朝日新聞』社会 2020a.7.31, 朝刊 26面
- 西本秀「<評伝>悲哀背負った「民主先生」 / 台湾の近現代史体現 / 李登輝氏死去」『朝日新聞』総合 2020b.7.31, 朝刊 3面
- 藤原秀人「平成とは取材メモから (105) : 台湾 (5) 司馬遼太郎の案内人」『朝日新聞』憲法 2019.1.10, 夕刊 8面
- 堀江義人「新しい日台関係 / 共通の利益を基盤に (ニュースの視点)」『朝日新聞』オピニオン 2000.4.19 朝刊 14面
- 村井重俊「街道についてゆく司馬遼太郎番の6年間 (14): ショーン・コネリー」『朝日新聞』地方 (大阪府) 2008a.4.29, 朝刊 29面
- 村井重俊「街道についてゆく司馬遼太郎番の6年間 (13): 果子狸、10年も先取り」『朝日新聞』地方 (大阪府), 2008b.4.22, 朝刊 25面
- 山折哲雄「生老病死 / 「街道」でたどった司馬遼太郎」『朝日新聞』週末 be/b9, 2019.10.12, 朝刊 9面

